

フツサル現象学における習慣概念の意義

——ギルバート・ライルにおける機械的習慣論との対比を通して——

増田隼人

習慣は如何にして働き、人間の活動において如何なる役割を果たすのか。この問いは哲学において古くから関心を当てられてきたものであり、今なお議論されている中心的課題でもある。習慣には強力な概念的緊張が内に含まれており、たとえばそこでは、意識と無意識、意志と惰性、人間性と機械性、固着と適応、本能と文化、個人と社会……等々の諸概念間の関係が問われてくる。本稿においては、ギルバート・ライルにおける静態的・機械論的な習慣概念と、フツサル現象学における力動的・志向的な習慣概念を比較することを通して、人間活動において習慣が及ぼす影響の功罪について検討する。

一 ギルバート・ライルによる習慣概念

——習慣の盲目性と機械性

習慣は、私達が様々な経験を通して形成してきた獲得物であ

り、私達の生活における多くのコストを軽減し、安定化させるものである。習慣なくしては、私達が日々の生活を送ることは非常に困難なものとなるであろう。しかしその反面、この習慣による安定化は、私達の行動を一定の仕方に固着させることとも意味しており、すでに妥当性を失った判断や行為を習慣に導かれるまま不適切に行ってしまうという事例は枚挙に遑がない。このような経験的事実によって、習慣はしばしば非合理的且つ機械的な原理とみなされる傾向にある。

習慣の特性を解釈するに当たり、習慣のこのような負の側面を強く指摘する代表的な論者としては、英国の日常言語学派に分類されるギルバート・ライルの名が挙げられる。ライルは、著書『心の概念』において人間の諸行為の性質を決める一つの基準として、「理智性 (intelligence)」という概念について述べている。ライルによれば理智的行為とは、「行為者がそれを為

しているときに、自らの行っていることを思慮している」ことを指し、ある人が理知的であるとは、自らの行為を批判的に吟味したり、個々の状況に合わせて自らの理論や行動を自覚的に調整したりする能力があることを意味する。^② たとえばそこには、論理的推論のような理論的行為のほかにも、職人や運動選手の技能のような身体行為が含まれる。どのような行為が理知的と言えるかは、その行為遂行に対して自我の自覚的な注意作用がその行為に向けられているかが基準にあると考えてよい。

このような理知的行為に対して、ライルにとつての習慣とは、理知性の範囲から外れた行為という意味しか付与されていない。ライルにとつて習慣とは、「それを自動的に行ったり、自分がしていることを思念なしに行う」^③ ことである。それは、以前行われた行為の単なる反復にすぎず、そこに理知的な働きは何ら含まれない。先に述べた職人の技のような技能知（ライルにおいては、「方法知 (knowing how)」と呼ばれる知の形態）は、言語的・概念的な指示作用を経ることなく作動しうるという点でしばしば習慣と同一視されるが、それはあくまでも自我の目的な注意作用の下で遂行されているという点で習慣とは一線を画している。すなわち、理知性の有無という点によって、ライルは習慣と方法知を別のものとして規定するのである。

ライルの分析における理知的行為と習慣的行為の分断的性格は、それぞれの能力が得られる方法的プロセスについての言及にも顕著に表れている。そこにおいてライルは、方法知が「訓

練 (training)」を通して、試行錯誤を経て学ばれるとする一方で、習慣は単純な「反復練習 (drill)」によって獲得されるものだとしている。ライルは両者の区別について、「反復練習は理知性を失わせ、訓練は理知性を成長させる」^④ と言及しているが、これはそのまま習慣的行為と理知的行為の特性の違いとしても転用可能であろう。マックガークは、こうしたライルの習慣概念について、それは外的な刺激によって引き起こされる自動的ないしは非合理的な状態であり、非人間の・動物的な状態であると特徴づけている。いわば、習慣的行為は、特定の刺激に対して機械的に反射応答しているにすぎないということである。それゆえ、ライルにとつて習慣的であるとは、当該の行為やその行為を成立させている知について無自覚な状態、不自由な状態を指している。その状態にあつては真の意味で世界や自己の知に関与しているとはいえず、その知の発展可能性もありません。裏を返せば、ライルにおいて世界との真の関わりは、理知性を通した自己透明性と共に進めなければならないということになる。そして、習慣はそれを為す上での阻害要因としてみなされるのである。^⑤

習慣を単なる「刺激―反応」形式で捉え、それを機械的の反復として捉える解釈の背景には、記憶をコンピューターの保存データや倉庫に貯蔵された物のような、静的なイメージで捉える古典的見方が根底にある。このような見方においては知の刷新やその動性は、あくまでも理知性ないしは意識の側に属するこ

となり、記憶は単に意識に呼び出されるのを待っている素材という位置しか持ちえない。意識的操作から外れて自動的に動いているように思われる習慣に關してもその基本的性質は同じであり、再現前に際して要求されるものが主体の意識作用から外的刺激に置き換えられているだけである。外的刺激を受けるまでただ眠り、該当の刺激を受ければ以前の行為の複製をただ反復する。習慣とは、そのようなものとして考えられている。

しかし、こうした見方に反して、記憶や習慣そのものの持つ自我への力動的影響を強調したのがフッサールである。フッサールは、以前の諸体験が痕跡もなく消えることは決してないこと、そしてそれが後々まで影響を与えるものであることを随所で強調している (vgl. Hua IV, 135f & EU, 137)。そこには、「以前の状態が以後の状態を機能的に規定する」(Hua IV, 137) という一種の依存関係が見られるが、それは決して単なる固着や反復を意味しているのではなく、「心の本質には性向の連続的な新たな形成、ないしは組み換えが属している」(Hua IV, 136。強調は筆者による) というように、連続的な生成や発展という面が強く目差されている。フッサールにとって習慣とは、自我がその全生活を通して積み上げていく歴史そのものであり、そしてこの歴史は、今このときにも刷新され続けていく有機的なものである。こうした基本的理解に則って習慣という現象を再解釈した場合、ライルのそれとはまったく異なった習慣像が出現してくる。それは単に外的刺激によって呼び起こされ、応答す

るような機械的なものではなく、それそのものが現在を生きる人間活動を基づけ、突き動かすような、生き生きとした力動性を持った習慣の解釈である。次項ではこうした特徴を持ったフッサールの習慣性概念をライルのそれと対比しながら述べていくこととする。

二 フッサールにおける習慣概念

——習慣の持つ力動性

それではフッサールの習慣概念とは如何なるものであろうか。非理知的な条件反射行動として先鋭化されたライルの概念規定とは対照的に、フッサールの習慣概念は、並外れた適用範囲を持つている。たとえば、『経験と判断』において、習慣とは、我々が生活世界において生きるに当たって行う認識、実践、価値づけといった諸経験の中で獲得されたものであり、「様々な生活状況における決断と行為に当たって確実性 (Sicherheit) をもたらす」(EU, 63) ものだとされている。そこには個人の趣味嗜好は勿論のこと、政治的信念や他者への愛憎、さらには、習得された各種の能力や癖なども含まれる。いわば、フッサールにおいて習慣性とは、自我がその人生の歴史において獲得してきた持続的な傾向性ないしは可能性の総体であると言つてよい。このような広範性を持ったフッサールの習慣概念の適用範囲は、判断や、フッサールが言うところの「確信 (Überzeugung)」のレベルにまで広がっている。私が何かを判

断するとき、その判断はその場限りの判断として働くばかりでなく、その後の自我全体に対して影響を与える。いわば、私は永続的にその判断をしたことになるのであり、全体として言えば、そうした様々な習慣の基体として、個人としての自我や人格性が形成されてくるのである (vgl. Hua I, S. 33)。すなわち、フッサールの習慣概念はライルとは対照的に、個々人の判断や人間性の形成における地盤として積極的に活用されるものである。

そして習慣はさらに、知性的な態度ないしは確信の仕方だけではなく、欲望や感覚、情動の仕方でもありうる。ベーネットによれば、フッサールの発生的現象学の分析において、もっとも低いレベルの習慣は、先意識的であり、先自我的でもある欲望や衝動が連合された習慣として考えられている。フッサールは、『イデーニ II』において、具体的な経験的自我（人格的自我）の諸活動を、理性による能動的な作用に基づけられたものと、連合による無意識的な傾向性に基づけられたものとに区分する一方で、「習慣は、根源的に本能的な行動に対しても、自由な行動に対しても形成されなければならない」（Hua IV, 255）とした。フッサールによれば、「ある衝動に従うことは、習慣的に屈従する衝動を基づける」（ibid.）が、これに加えて、価値の動機づけにしたがってある衝動を我慢することは、その「衝動に抵抗する傾向」を生じさせることもなる。すなわち、ある衝動を理性的に我慢することは、単に当の衝動の抑制を意

味するのではなく、「我慢する」という新たな衝動の形成を意味し、その衝動もまた習慣化されていくとしているのである。

このことは、衝動や本能と結びついた諸習慣が、ときには自我の振る舞いを先導する主導権を巡って互いに抗争することを示唆している。そこではある欲求とそれに対する我慢のような抑圧的な抗争だけでなく、「喫煙の欲求」対「摂食の欲求」というように、種類の異なる衝動間での優位性を巡る抗争も考えられるだろう。しかもここで改めて強調されるべきは、こうした諸衝動間の抗争は、意識化された心理的葛藤という形を取るだけではなく、そもそも意識化される以前からすでに始まっていると考えられていることである。

フッサールによれば習慣的な動機づけは、「ほとんどの場合、意識において現に存在しているにもかかわらず、それが浮かび上がることはなく、気づかれずいたり目立たずにいる（無意識である (unbewußt)）」(Hua IV, 222) ものである。人間の諸行為は「暗い基底において動機づけられており、心的な理由を持つ」(ibid.) が、それはいわゆる「精神分析」によつてのみ事後に明るみに出すことが可能であるような性質のものであるとされる。すなわち、フッサールはここで、私達の判断のある部分は無意識のうちに動機づけられ、方向付けられていることを指摘しているのである。

フッサールにおいて習慣はこのように、それ自体が力動的に蠢くものとして捉えられている。習慣は、その形成の端緒にお

いはは自我の諸行為や諸判断を契機として持ち、その意味では自我的なものとしてもみなされう⁽¹⁰⁾。しかし、他方において、それが機能する場面においては、連合ないしは受動的綜合を通して、自我の諸行為を先意識的に基づける（動機づける）という役割を持つ。前節で強調したように、ライルにおいて習慣は、理論的な活動からは厳に切り離されたものであり、外部刺激に応じて単に条件反射行動を起こすだけの無意味な反復行動にすぎない。しかし、フッサールの場合、習慣概念を自我活動の根本的な動因である動機づけ、とりわけ衝動志向性へと関連付けることで、そこに生命としての欲動、あるいは人間の「関心の生」の発露として力動的且つ有機的な習慣像を描いて見せているのである。

三 人間の高次の意識活動と習慣の関係

このようにフッサールの習慣概念は、ライルの機械的な習慣概念に比して、有機的な性格を強く持っている。とはいえ、このことは、ライルが習慣を理性性の単なる欠如態とみなしていることに対する十分な対比にはまだなりえていないだろう。実際、ライルによる習慣に対する批判的な思考には、否定しきれない強力さがあるのはたしかである。本稿の冒頭で述べたように、習慣に流されて不適切な行動を取ってしまうということは日常生活レベルにおいても多々あることであり、いわんや、哲学——とりわけ現象学の方途から見ると、習慣の形成は、現象

学の営みとは真逆の方向に進むものであるとさえ言ってもよい。というのも、現象学的分析の基本的な方法である現象学的還元が、自然的態度における素朴な信憑や定立作用を「遮断」し、「括弧入れ」し、「エポケー」を通して「停止」させるのに対して（vgl. Hua III, §31-32）、習慣の形成とは、諸経験の反復やその沈殿化を通して、そこに現れたものをまさに慣れ親しんだものとして背景化していく性格を持つからである。習慣的なものは、いわば意識から隠されているのであり（vgl. Hua IV, 222）、その存在すら気づかれないままに、一種のドクサとして現象学的分析の純粋性を阻害する可能性がある。その意味で現象学者にとっても習慣は、危険な障害として捉えられうる。しかしながら、それでもなお、フッサールにとって習慣は、人間存在の発展、そして現象学の発展にとって欠くことのできないものであることは強調されねばならない。注目すべきことに、フッサールの草稿の中には、「現象学的エポケーの習慣」（Hua XIII, 208）や「内的自由の習慣」（Hua III, 224）等々の、前述の観点からしてみると一見矛盾的にも思える語句が登場する箇所がある⁽¹¹⁾。はたしてこれらの言葉は、フッサールにとってどのような意味を持つのだろうか。

後藤は、この問題に関連して、フッサールの草稿における、倫理的であろうとする人間の態度と、真理を探究しようとする人間の態度が、類似した仕方で語られている個所に着目している⁽¹²⁾。そこにおいてフッサールは、人間が「目的理念」として完

全性を希求し、そこに向けて自由に努力しうる一方で、習慣的なドクサや、いわゆる惰性に陥る可能性も同時に持っていることを指摘している。そして、フッサールは、それらを回避するために、「自己の内に、ある習慣を定立」せねばならないと主張する (vgl. Hua XXVII, 38)。これは一見、アンビバレンツな

主張にも思えるが、このことが意味するのはすなわち、習慣的なドクサに盲目的である自然的態度を克服するには、目的理念へと向かう努力の姿勢そのもの、批判的な態度そのものの習慣化が必要であるということである。これは、個別的な習慣というよりも、自我が対象へと向かう際の全般的な態度ないしはスタイルの変更の習慣化であり、自由な批判的態度を保持するための習慣化であると言えよう。⁽¹³⁾ 後藤は、このような批判的態度の習慣化の必要性は現象学の実践においても当てはまるとし、このような現象学的態度における習慣と、自然的態度における習慣の関係について、「自由な批判の習性」は、「先反省的な習性を継続発展させた形態であると同時に、それを批判し続ける」という点では、それとの断絶を蔵している」と指摘している。⁽¹⁴⁾ フッサールによれば、このような批判的態度それ自体の習慣化は、「学的理性による自由」によって学問の最終的な基礎付けを自論む現象学者にとって必須なものであるとされる (vgl. Hua XXVII, 116)。

このような習慣——いわば「現象学的態度の習慣化」とも言うべき習慣の捉え方は、ライルにとってすれば詭弁に映るかも

しれない。フッサールによるこの論法は、いわば、ライルの言うところの理知性そのものが習慣的に形成され、保持されねばならないと主張するものだからである。しかし改めて考えてみると、そもそも理知性と習慣はライルが言うほど、明瞭に区別できるものだろうか。

実際、言語的・非言語的によらず、人間の活動のどこまでが意識的制御に委ねられているのかは内観的にも曖昧である。「心の概念」の翻訳者でもある坂本百大は、「現実の行動の中にはかなり明瞭に意志的であるか否か断定できるコントロールが多い」と認めつつも、それが条件反射や習慣的と言われる行動の場合、その関与の程度を厳密に論証することは非常に困難であると指摘している。その一例として坂本は、たとえ一見意志的な決断と思われることでも、「それは彼の思考傾向のパターンの批判や討論を通じて強化されたものと言えないこともない」として、意志と習慣の境界の曖昧さについて論じている。⁽¹⁵⁾ 坂本は、「初回の行動が条件行動であることは原理的にありえない」としながらも、ある初回の刺激がそれと類似・近接した条件行動を代置的に引き起こしたり、条件行動の結合がより大きな条件行動の枠組みを作り、新たな刺激に適応させることは十分に考慮可能であるとし、さらにはそうした代置や結合それ自体がパターン化される可能性について指摘している。坂本によれば、「意志による行動もすべてある程度条件反射のことばで表現できる」ものであり、意識的と反射的とは必ずしも対立

概念としてあるのではなく、「条件反射は相対的な概念」である。⁽¹⁸⁾

理性性の関与の有無を基準としたことで、ライルの習慣概念はたしかに非常に明瞭に定義されていると言える。とりわけ、高次の注意作用を伴う方法知の機能と、単なる習慣的行為の作動とを区別するには、その線引きの仕方は強力な効果を発すると言えるだろう。しかし、坂本の指摘するように、実態として見た場合、習慣が意志（理性性）による行為にどこまで影響を及ぼしているか確定することは困難であり、その意味では、ライルの鋭敏すぎる区分の仕方は、習慣と理性性の間にありうる隠れた関係を見逃すことになりかねない面があると言えよう。

その点、フッサールにおける習慣は、ライルに比べて概念的な定義としては曖昧な部分はあるものの、それだけに展開可能性が広く残された概念である。メルロ＝ポンティやアルフレッド・シュッツなど、フッサール以後の現象学者達も習慣について独自の考察を打ち立てたが、そうした様々な思索を育てる豊かな土壌がフッサールの中にはあったと言ってよい。「習慣は、本能的な行動に対しても、自由な行動に対しても形成されなければならぬ」(Hua IV, 255) という言葉に端的に示されるように、フッサールにおいて習慣化は自我のあらゆる活動に対して常に働き、その後の自我の活動に潜在的に影響を与え続ける。それは現象学的分析の最中においてでさえ同様であり、習慣は、現象学的態度そのもの、あるいは現象学的分析の対象そ

のものがそこから立ち現れてくるような「場」を作り上げているのである。したがって、フッサールにおいて習慣の形成は、単なる注意の欠如や、ましてや世界と自己との関係の喪失としては捉えられない。むしろ、フッサールにとって習慣とは、自己と世界との関係の仕方を拡張し、世界に対してより広く身を開くためのものとしてあるのである。

凡例

『フッサール全集』(Edmund Husserl, *Gesammelte Werke* (Husserliana), *Aufgrund des Nachlasses veröffentlicht unter Leitung des Husserl-Archivs Leuven, Den Haag*) からの引用は (Hua 巻数) 頁数 の略号を用いた。また『経験と判断』(“Erfahrung und Urteil”: *Untersuchungen zur Genetologie der Logik*, Hrsg. von L. Landgrebe, Prag: Academia/Verlagsbuchhandlung) からの引用は (EU 頁数) の形で示した。

- (1) Gilbert Ryle, *The Concept of Mind*, edited by Taylor & Francis, 2009, Routledge, p.18. (『心の概念』坂本百大・井上治子・服部裕幸 共訳、みすず書房、一九八七年)
- (2) *Ibid.*, p.30.
- (3) *Ibid.*
- (4) James McGuirk, “Metaphysical and phenomenological perspectives on habituality and the naturalization of mind”, *Analytic and ontological Philosophy*, pp.203–214, 2016, pp.204–205.
- (5) このような習慣の見方は、ライル以外にも見られる一般的なものである。たとえば熊谷は、ヘルクソンの『創造的進化』において習慣は、「生命進化の「唯一の大きな努力」を妨げるものであり、人間において実現した自由を「自動作用」と化し、自由を「窒息」せしめるものと見なされている」と指摘している(熊谷征一郎「西田哲

学における「習慣」の意義——ラヴェッソン、ベルクソン、メーヌ・ド・ビランの受容において——」『比較思想研究』第三五号、二〇〇八年、四一頁。

(6) 榎原哲也『フッサール現象学の生成』東京大学出版会、二〇〇九年、二二一頁参照。

(7) フッサールにおいて能力と習慣は切り離せない概念である。フッサールは、「私は顕在的のみならず、習慣的な自我でもあり、そして習慣性はある特定の自我の可能性を、『私はである』、『私はできた』、『私はであるべき』とどうしように示す」(Hua XIV, 378)と述べている。フッサールにおいて能力の形成は、「習慣性と同様に、あるいはまた、習慣性の一つとして、自我意識の構成や同一性と直接的に関わって起こるとされる。

(8) Cf. Rudolf Bernet, "Unconscious Consciousness in Husserl and Freud", *The New Husserl: A Critical Reader*, Bloomington: Indiana University Press, 2003, pp.199-219.

(9) フッサールは『受動的総合の分析』において、自我の対向を促す諸触発の抗争について論じている。そこにおいて触発の現象は色や音のような外的な事物が中心に述べられているが、過去の記憶の産物である空虚表象が自我を再覚起する力や、感情の領域についても触発の現象に含められている (vgl. Hua XI, 150)。

(10) とは言え、習慣の形成過程に必ずしも自我の関与が必要かは問題である。ヴァルデンフェルスは、習慣の由来を「能動的獲得」と「受動的獲得」の二つに区別し、前者による習慣を「以前に行われた能動性に由来」し、「人格的歴史」を形成するものとみなす一方、後者の習慣は、「自分に固有な能動性に先行するもの」、「その人格の先一歴史」に該当するものと定義している(ベルンハルト・ヴァルデンフェルス『講義・身体現象学』山口一郎・鷲田清一監訳、知泉書館、二〇〇四年、二〇一頁参照)。

(11) また、フッサールは、『論理学研究』においてもすでに、現象学的考察は、訓練された「反省とらう反自然的習慣」(Hua XIX/1, 16)

によって遂行されることを述べている。

(12) 後藤弘志『フッサール現象学における倫理学的解釈』ナカニシヤ出版、二〇一一年、二一〇—二二四頁参照。

(13) ビセアアガは、個別的な習慣と、態度やスタイルとしての習慣の違いについて、「獲得された習慣は私達が行った行為が経験したものに影響される一方、前述語的な経験の全体的なスタイルとしての習慣は過去の経験の繰り返しとは関係なく作動する」と解釈している (Victor Biceaga, *The Concept of Passivity in Husserl's Phenomenology*, London: Springer, 2010, p.70)。

(14) 後藤、前掲書、二二一頁参照。

(15) 坂本百大『人間機械論の哲学』勁草書房、一九八〇年、一七二頁。

(16) 同上。

(17) 同上。

(18) 同書、一七二頁。坂本の指摘は、内観としては意志的と思えることでもその背景において習慣による影響を被っている可能性は否定できないということになる。

(ますだ・はやと、西洋哲学・現象学、

東洋大学大学院博士後期課程)